

税は幸せを奏でる

西之表市立種子島中学校 3年 橋元 祐奈

世界は音であふれている。学校のチャイムの音、駅のホームの発車メロディ、公園から聞こえる子どもたちの笑い声。これらはすべて日常の中に溶け込み、社会にあたりまえに存在している。日常の中にあたりまえにあるこの「音」と「税」がどのように関わっているのか、この夏深く考えさせられた。

「税」と聞くと、私は真っ先に「増税」という言葉を思い浮かべた。それと同時に、ニュースで見た、負担が増えることに対して不安を語る人、増税への苛立ちを露にする人の姿を思い浮かべた。税の恩恵を受けているはずなのに、人々が税に対してマイナスなイメージを抱いてしまうのはなぜだろう。私自身も、最初は税に対してあまり良いイメージを持っていなかった。しかし、税に対するイメージが大きく変わるきっかけがあった。

学校で行われた租税教室でのことだ。アメリカのニューヨークで救急車を呼ぶと、最低でも約三万円かかるのだと習った。さらに、走行距離などによって追加料金がかかり、一度救急車を呼ぶだけで十万円以上も負担しなければならない場合があるという。これだけお金がかかるのなら、救急車を呼ぶことをためらってしまいそうだ。一方日本では、救急車を無料で呼ぶことができる。だが、救急車を走らせるのにも当然お金がかかる。それを賄っているのが税金だ。いつでも誰でもSOSを出せる環境があるのは、税金のおかげなのだと改めて知った。思えば、日常の中でふれるほとんどのものが税金で整えられている。子どもでも安全に楽しく遊べる公園があるのは、税金による定期的な管理があるからだ。毎日使う駅は、どんな人でも快適に乗車できるように工夫されている。その工夫を実現するのも税金だ。私自身も、税による恩恵があたりまえにあるばかりに、気づくことができていなかった。だから私たちは、その恩恵があたりまえではないことを今一度確認し、税による負担感だけでなく、税の目的や役割にも目を向けていくべきだと思う。

この教科書の裏側には、大人が一生懸命働いて流した汗がある。公園には、老若男女問わず、すべての人の笑顔を望む人のぬくもりがある。すれ違う救急車のサイレンは「必ず命を救う」という覚悟の音だ。これらを実現するのが税の役割だ。税金は目の前の利益や、何もしないで楽をするためにあるものではない。より明るい未来へのための貯金なのだ。税を納めることによって、つながることができる人がいる。救える命がある。だから私も、遠くの町の人の笑顔のために働き、税を納める納税者になりたい。そして、納めた税金がどこで、どのように活用されているのかにも目を向けられる人間になりたい。

税は幸せを奏でる。目を閉じて、耳をすませば、温かい音が聴こえてくる。過去と今、そして未来をつなぐ音が聴こえてくる。

今日も世界は音であふれている。